合成化学科「１０年のあゆみ」（１９６７年）から

合成化学科創設１０周年にあたって

秋　吉　三　郎

先般松田教授と村上教授が来訪されて、合成化学科創立10周年記念として今日までの研究成果をまとめて出版することとなったので、学科設立の経過について書いて欲しいと懇請された。私はこの企画に雙手を挙げて賛意を表すると共に、先ず本学科の新設に特別の御尽力を恭うした山田前学長と当時の九大事務局の方方、並びに建築資金として多額の寄付金を賜った諸会社に対して衷心から感謝の意を表し度いと考える次第である。

さて実をいうと、私は22ヶ年の国立研究所での研究生活から当時我国では欧米一流国なみの独創的研究の達成は殆んど困難であることを自ら体感したのであったが、その根本原因は大学教育にあるという外はなく、それらの国と同様に我国一流大学の大学院の研究教育が世界的な高度化を果し、国の研究開発の基盤となるべきであると考えるに至ったことを告げ度い。そこで戦後は家庭の事情もあったけれども、出来れば大学に帰って大学の設備の近代化を計ると共に、大学院の拡充整備を行って研究の高度化を果すことに余生を捧げ度いと念願するに至ったのである。ところが幸にも恩師君島先生の御厚情によってこの希望が果される光栄に浴することとなり、終戦直前の昭和20年6月に大工試の了解を得て母校九大応化の教授として第3講座の担任を命ぜられるに至ったのである。私は兼ての宿願通り教室設備の近代化を進むると共に、応化系大学院の強化策として九州にふさわしい合成化学科の全国で初めての新設に総力を結集して邁進することに決意したのであった。

ところが私に与えられた第3講座は戦時中の混乱の為めであろうが、残念ながら利用し得る測定器類も実験設備も消耗品さへも何一つない荒れ果てた研究室であった。従って私の研究計画は殆んど実行不可能で、念願の精油化学の研究は勿論放棄せざるを得なかった訳で淋しい思をしたことを忘れ得ない。そこで止むを得ず染料染色の講座をやがて発展するであろう合成化学の講座に改め、高分子化合物を主体とした合成化学の研究に邁進することとし、貧しいながらも意気盛んな研究室としてスタートしたのであった。ところがこの貧しい研究室に優秀な学生諸君が集って呉れたので、次ぎ次ぎに大学院特別研究生として残って貰い合成研究に精進していただくことにしたが、本当に苦労の連続であったであろうと回顧して冷汗三斗の思いに心が痛む。しかしこれからの諸君の涙ぐましい精励によって漸次研究業績の向上が達成され新学科創立の基礎が出来上がったのであって、ここに原田、橋本、麻生、奥野、柘植、松田と特研究生諸君と、上野、小林君らの研究生諸君とに心から厚く御礼申し上げ度いと思う。

一般に新学科設立の必要条件はｉ）研究業績を挙げること、ⅱ）最新の研究設備に改めること、ⅲ）優れた新進の教官を多数養成すること、の3点につきるであろう。そこで昭和24～5年に設備改新の寄付金を諸会社に御願いしたいと考えて関係の会社を回ったが、当時の我国産業界の力では一社30万円が限度で迚も目的の達成は困難であることが明らかとなり、止むを得ず中止せざるを得なかった一幕もあったことを記しておこう。ところが待てば海路の日和というか、昭和25年頃から我国文教行政が落ちつくに従い、文部省において最新の測定機類の素晴らしい世界的な発展に処する為めの各種研究補

助金が設定されたので、私はこれらの研究費の獲得に全力を挙げることにし検討を進めたのであった。幸にも昭和27年度には輸入機械の補助研究費をいただき、昭和29年には機関研究補助金、昭和30年には化学促進研究費など次ぎ次ぎに特別研究費をいただいたので、昭和31年～2年頃には全く新しい合成化学研究室として近代化が略完成さるるに至ったのであつた。かくして秋吉研究室を作ってから10年、研究業績の点から言っても研究設備の点から言っても新進気鋭の教官の陣容から言ってもほぼ初期の目標を達成することが出来たと考えられたので、私は昭和32年度の予算として全く新らしい構想の7講座からなる合成化学科教室を我国で初めて九大に設置する案を提出して、自ら文部省、大蔵省に出かけて私の貧しい一講座で僅か10年の努力でさへもこの程度の成果を挙げることが出来るのだから、この新構想の学科の設立を認めて下さるならば必ずやその存在を世界に示す様な発展を達成することが可能であると言明したことは、重荷ではあろうが現教官諸君は忘れないで欲しいと御願いし度い。さて7講座の内容は既に御存じの通り第1－理論有機化学、第2－錯塩及び触媒化学、第3－低分子合成化学、第4－高分子合成化学、第5－有機分析（器機分析）、第6－反応設計、第7－反応制御であって、当時工学部の化学系学科としては全く最新の学問的構成であると言っても過言ではないと思う。従って教官には出来るだけ若い新進学者を当てたいと考えたが、私の研究室での僅か10年の養成によったのであるから極めて優秀ではあるが全く若いので、第6講座には応用化学科の坂井渡教授の御出馬を御願いし、第4講座には大阪市大の井元稔教授の御出馬を懇願したが、転任が出来ないとのことで兼任していただくことに御願いしてスタートすることと決めた。第1と第2には外部から極めて優秀な2～3の教授候補者の推薦があったけれども、この両講座は最新の理論化学を極める必要があると考えられたので、我研究室の優秀な新進の学徒を米国の大学院に送って親しく訓練をしていただき、これに当てるという対策をとることとして上申したのであった。文部省のある高官はこの予算案は誠に申し分のない出来で、許さるるならば是非通して上げ度いと思うとさえ言って下さったのであったが、昭和32年度は不況化が心配されていたので第一次査定では一学部も一学科も通さないという原則が守られたが、僅か1週間後に第2次査定で何等の修正を受けることなく原案のまま無事通過したことは本当に忘るることの出来ない感激であって、この日9月5日は私の一生の最善の日として記憶の新らたなのである。しかも教室新築予算の内約1500万円は会社からの寄付金でまかなう様上申してあったので、昭和33年度に400坪の新築予算が認められ続いて、昭和35年度に残り400坪の増築予算が与えられたので、昭和34年度から本学科の開学に全く支障が来たさなかったのであった。実は寄付金は殆んど私一人で集めたが、恰度業界の不況気に遭遇したので一時は私個人の借金で補う外はないかとさえ覚悟をきめた程であったけれども、幸甚にも諸会社の心からなる御懇情によって何んとか責任を果たすことが出来たのであった。私は御高配を恭うした諸会社に対し重ねてここに全霊全身以って御厚礼申し上げる次第である。かくして合成化学科は幸運に恵まれて順調にスタートし、早や創立10周年を迎えるに至ったことは誠に感慨無量であって私の喜びこれに過ぎるものはないのである。

最後に恩師西川虎吉先生は私の母校への帰学に際し、九大工学部に対する中央の批判は誠にきびしいものがあるから充分心する様にとさとされたのであったが、現在においても残念ながらそれは解消されてるとは申し難い。そこで私はこの記念出版に対して大方の厳正なる御批判を御願いし度い。合成化学科の教官諸氏は若くて熱心なる研究者である。私は諸君の美事な研究活動によって本学科が世界的な存在を示す様祈願して擱筆したいと思う。

「九州大学学報」特別号　原稿

高木　誠

入学以来ずっと九州大学で過ごさせていただいた。九州大学が与えて下さった全てに，心から感謝申し上げる。また責務を行うにあたり至らなかったことを，深くお詫び申し上げる。

幼時に経験した戦時と敗戦の記憶が根付いたのかもしれない。我々の世代の同僚と同じように，私も，日本が生きるに必要なのは自然科学であり技術であると健気に考えた。ごく自然に工学に進んだ。幸い日本は高度成長によって貧困を脱し，消費が美徳となり，物資が氾濫する時代に入った。やがて時が進み，地球環境を守るためには一転して物質・エネルギー消費を抑えることが課題とされた。短い年月の間に社会の価値観は大きく揺れた。大学もまた社会を映す。大学も大揺れの乱世であろう。

高度成長の時代から，我々世代も精励に務めた。しかし見続けた現実は，社会経済面での九州の地盤沈下であった。学術・技術面でも残念ながらそうであった。

しかし，九州は東アジアにおいて地政学的に恵まれた位置にある。大学を見れば，若い世代の同僚教官は優秀である。我々の世代が欧米の学術・技術・経済力を恐れと憧憬の目で見たのに対し，彼らの目線は対等であり自然である。また学生諸君も優れている。教官は自己の専門分野で教育研究に携わるため，学生をその専門内で評価しがちである。しかし教官の力が充分に及ばない新興の学術・技術分野に踏み込むとき，学生諸君はしばしば驚嘆すべき能力を発揮する。

私はもはや傍観者の立場にあり，乱世を好む言辞を弄するのは無責任である。しかし私は九大の若い世代の皆様に心から期待する。乱世は若い人の好機だからである。九州大学の皆様が輝かしい将来を築かれるよう，心からお祈り申し上げる。